

福島お達者くらぶだより

第49号 2008年10月11日 発行

お達者くらぶだより第49号をお届けします。

今回は久しぶりにこの会報に載せさせていただく手紙やメールがほとんどなくて、しかし、今はもうミーティングに来なくなった人たちでも、3ヶ月ごとにこのたよりが届くとまだお達者くらぶがちゃんと続いているのだと安心してくれる人たちもおられるし、中にはお達者くらぶからのたよりを楽しみにしていただいている方々もおられるかもしれないので、この秋の号も何とか出さねばなりません。この春にはこのたよりの費用を振り込んでいただいたばかりですし。

というわけで、この号では私（編集の香山）が書いたもので大部分を埋めさせていただきます。ただ、私は今すごく忙しく、たくさんの講義（自分の大学の講義だけでなく、福島大学と秋田大学の集中講義＝それぞれ半年分の講義を朝から夕方までぶっ続けで3日間でやってしまうのです＝を頼まれているし、福島学院大学（福祉学部）の「医学一般」という通年講義まで頼まれてしまって専門の生理学以外のことまで教えねばなりません）がある上に、いくつもの講演を頼まれていて、この号を発行したら翌週から上越市（市が世話をしている家族会）、名古屋市（ひきこもり親の会）、いわき市（養護の先生たちの研修会）、旭川市（精神科医の勉強会）と立て続けに出張が続き、新しく8ページもの原稿を書いている余裕はとて持てません。

それで、その講演で話す原稿の一部を基に少し書き加えたものを載せさせていただきます。原稿を集める努力を怠った言い訳をくださいと書いて申し訳ありません。特に私の本（食を拒む・食に溺れる心）を読んでいただいている方には、同じことが出てきて申し訳ありません。少し脱線気味に新しい考察も付け加えているのですが。

それにしても、このお達者くらぶだよりも年が明けて1月に発行する号で50号になります。その記念の号に、皆さん（本人の方も家族の方も）、何か一言ずつでも書いてみませんか。特にだいぶん前にミーティングに来なくなった方は、最近の様子などいかがでしょうか。そのサンプルといっは失礼ですが、古いメンバーの方のメールを載せさせていただきます。

近況：みゆき

ご無沙汰をしています。みゆきです。

最近の状況といえば特別な事はなく、仕事も休むことなく何とかやっています。

たまにデバス⁵を飲む程度で生活しています。

今年で何と37歳というあっというまにここまで来たと言う感じです。私が毎月医大に通ってたのは多分18歳頃から数年くらいだったと思います。あの頃は生きている事が有り難くもなく、消えたい~と思う日々でした。今は生きている、生かされている有り難みとかを感じれる気持ち、人と触れ合う楽しさを感じれる事が出来るのは、当時の自分の経験があったからだと思っています。

最近当時の仲間とメールをしたりしました。懐かしいですね。機会があればまたお達者にも参加したいのと、当時かかっていた先生を訪ねてみようとも思っています。仕事も何とかやれてますが色々と考え中です。転職とかも~。またメールします。毎日感謝の気持ちを忘れずに自分のペースで生きて行こうと思っています。最近は穏やかな気持ちでやっています。

思春期 14 歳・17 歳の危機

私たちの生きているこの現代、地球温暖化など、私たちを取り囲む環境が急速に大きく変化してきていますが、家族関係もまたその激動から逃れることができず、その影響は家族の中でしか生きられない子供たちに強く出ます。その影響が家族から外に出ていこうとするところで最も不幸な形で現れてしまった、思春期の少年の起こした事件のことを最初に振り返ってみたいと思います。

近年、少年たちが社会を騒がせる衝撃的な事件を起こすことが重なり、その低年齢化も問題となっていますが、その最大のきっかけとなったのは 10 年ほど前(1997 年)に神戸で起こった連続児童殺傷事件でしょう。この事件を起こしたのは酒鬼薔薇聖斗と名のつた 14 歳の少年で、この年は他にも同年齢の少年が起こす事件が相次ぎ、14 歳という年齢が注目されました(例えば、福島県の近く、栃木県的那須で、中学 2 年生の男子がバタフライナイフで先生を刺し殺すという事件がありました)。その 3 年後の 2000 年には 17 歳の少年の起こしたバスジャック事件が起こり、この年には 17 歳の少年の事件が相次ぎました。なぜこのように重大な事件を起こすことが多いのは 14 歳だったり 17 歳だったりするのでしょうか。

歴史を振り返ると、男は 15 歳で元服、女も「15 でねえやは嫁に行き・・・」と歌にあるように、子供たちは 15 歳で大人の列に加えられるのが通例でした。この状況は、多くの人達が中学卒で就職していた、ほんの数十年前まで続いてきました。東北地方から、まだ昨日までいがり坊主に詰め襟の学生服やおかっぱにセーラー服でいた中学生が、初めて故郷の町を離れ(修学旅行以外では初めて長距離列車に乗った人だっていたかもしれません)ポストンバッグを手に不安を心にいっぱいかかえて上野駅に降り立った集団就職列車はその象徴だと思いますが、その集団就職列車は 1975 年まで運転されたということ、たった 30 年ほど前のことです。

(ついでに言うなら、上に一節を書いたのは「赤とんぼ」という歌の 2 番の歌詞で、ちょっと年上の人たちなら誰でも知っていると思いますが、若い人は知っているでしょうか。嫁に行くといっても、ごくふつうの庶民、特に農家では、次の世代を継いでいく子供を産むためではなく、当面の労働力として期待されたのではないかと思います。この歌の「ねえや」というのも、子どもの頃から金持ちの家の小さい子どもの子守奉公に出されていた人でしょう。)

14 歳というのは、その大人の中に入っていき 15 歳直前の、大きな不安を抱える時期なのです。自分もうまく甘えてなんかいられない大人の世界に入っていかなければならないけれど、それがうまくできるだろうかという不安とともに、多くの若者は 14 歳の時に、将来にわたってどのように生きるかを具体的に決めることになる職業の選択についても考えなければなりません。

そこに、思春期特有のとまどいを含む性衝動が加わります。その衝動には、単に性的な欲求だけでなく、それまで一方的に親からの愛情と庇護をうけてきた(あるいは反対に殴られるばかりだったという場合もあるでしょうが、その場合も親からの一方的な働きかけを受けてきた)状態から、自分も一人前の人として他の人に働きかけたという独立の欲求という意味も含まれます。それは独立戦争ですから、それまでのように親に頼れずに一人で闘わねばならないという不安を伴い、しかしその衝動や不安定さをうまくコントロールする知恵をまだ持っていない、思春期というのは誰にとっても非常に危険な時期なのです。ロミオへの許されぬ恋に揺れたジュリエットも 14 歳になるときでした。

職業選択に関しては、高学歴社会となって生き方の決定を考えはじめる時期が中学校よりも高校卒業を控える 17 歳に繰り上がり、そこでもう一度不安定な時期が来ると考えられます。ここでも、とりあえずは大学や専門学校に行くことにして、生き方の決定を先延ばしすることはできます。しかし、そうするにしても、大学のどの学部、あるいはどの分野の専門学校を選ぶかは考えなければならず、それは生き方の選択を意味しています。

このように 14 歳、17 歳をピークにして、思春期が危機であることは昔から変わっていません。それなのに、思春期の少年たちが起こす事件がこのように大きな衝撃となる現代は何が変化したのでしょうか。

少年が起こす犯罪の数自体は、犯罪白書（法務省）や警察白書（警察庁）に見られるように、第二次大戦直後および 1960 年頃を 2 つのピークにして、それ以後には大きく減少して、現在も増加の傾向はありません。（強盗事件だけは数年前から少し増えたのですが、それは万引きを見とがめられたときやひったくりをしたときに相手を突き倒したような、以前なら窃盗 + 傷害として処理していた事件を、厳罰化のために強盗として扱うようになったためで、実際には増えていません。）しかし少年の起こす事件が社会に大きな衝撃を与えるようになったのは、なぜそのような事件を起こすに到ったのかを、特に大人の世代にとっては理解しにくい、不可解さが人々の不安を煽るからでしょう。

これを政府は、世論の声にも押されて、刑事裁判を受けさせることのできる年齢の 16 歳から 14 歳への引き下げと厳罰化という少年法の改正で対応しようとしてきましたが、昔からあるような暴行や強姦といった粗暴犯はさておき、理由の不可解な事件の発生をそれで抑止できるとは思えません。実際、少年法の改正から間もなく、4 歳の子供を駐車場ビルから突き落として死亡させた 12 歳（中学 1 年生）の少年の事件（2003 年）、さらには同級生の首をカッターナイフで切って死亡させた 11 歳（小学 6 年生）の少女の事件（2004 年）が起こり、さらなる低年齢の子供たちの不可解な事件が衝撃を強くしました。

そのような低年齢化の一方で、不登校になったり引きこもってしまったり、また拒食症・過食症などの行動への依存に陥って、社会の中でのふつうの生活にうまく適応できずに苦しむ人たちが非常に増えてきており、しかも、本来は思春期の問題であったこのような人たちの平均年齢が上がり続けています。例えば、全国で 100 万人に達するのではないかとされている引きこもりの人たちの平均年齢は 30 歳に達しており、その親は定年退職している人たちが増えてきていて、年金生活に入って減少した収入で引きこもっている子どもを支えきれぬかという問題が起こってきています。また、お達者くらぶだけでなくどの摂食障害グループでもミーティングに来る人たちは、1990 年代初頭には中学生・高校生がたくさんいて、明らかに思春期の人たちが中心だったのですが、今は平均年齢で 20 歳代後半でしょうか、過食を始めたのも大学を出て就職してからだったり、ミーティングに来た人の半分以上が子供のいる人だったこともあるなど、高齢化が目立ちます。

（ちなみに、摂食障害に苦しむ思春期の人たちがいなくなったのではなく、それは今でもたくさんいると思われます。ただ、以前は自分だけがおかしいのじゃないかということまで自分を責めて苦しんできた人たちが這々の体で自助ミーティングにたどり着いたときに心から救われたような思いを持ったのに対し、今は食べ吐きやリストカットなんて当たり前、みんなやってるよという雰囲気社会に流れるようになったために、あまり隠さなくてもよくなって、それだけミーティングに頼るようなことが少なくなってきたのだと私は考えています。）

このような引きこもりや摂食障害の高齢化は、フリーターの状態にある若い人たちの増加と共通する問題であり、豊かな社会ゆえに起こる現象でしょうが、思春期に解決しておくべき問題が放置され、あるいは解決できずに引きずり続けていると言えます。このように、一方で低年齢化、他方で高年齢化と広がってきている思春期の人達を取り囲む社会の状況の変化について、何がその根源にあるのかを考察していけば、現代社会の特徴が見えてくるのではないかと考えます。

地域社会の崩壊と家族

このような事件を含む社会現象は、家族関係の変化が、家族の中でしか生きられない小さい子供たちに一番大きく作用し、それが不安定さに揺れる思春期の世代で吹き出してきているものと考えられます。その「家族」を大きく変化させた最大の要因は、産業構造の変化によって引き起こされた人口の都市集中と、それに関連した地域社会の崩壊でしょう。(これは私の考えなんかではなくて、もう常識のように言われていることですが。)

日本の伝統的な社会構造は「家」制度を中心とした農村型社会であり、そこには血縁だけでなく地縁に基づく共同体である「地域」が根づいていました。結婚も現在のよう個人恋愛関係に基づくものではなく、世話をする有力者の存在が大きく作用して、「家」どうしおよび「地域」どうしの人の交換という側面を持っていました。「家」の中に問題が生じた場合も、それを「地域」の人々がカバーして解決してきたのです。熊本県の古謡「おてもやん」の歌詞「村役、鳶役、肝入りどん、あん人達のおらすけんで、あとはどうなるときゃあなろたい」は、このことをよく示しています。(村役は今で言うなら村長、鳶役は消防署長、肝入りどんは世話役でしょう。ついでに言うなら、このおてもやんはなぜそんな人たちがいるから何とかなるだろうと言ったかという、「嫁入りしたこたしたばってん、お亭どんがぐじゃっべじゃっけん、まだ盃やせんじゃった」と、亭主が頼りない男だったからで、まだ盃を交わす正式な結婚はしていないのです。昔、庶民の間では、女の人たちは生活力にあふれていて、酒を飲んでぐずぐず言うばかりで自分では何もできないような男たちよりもずっと強かったのかと思います。女の人たちの性関係などもおおらかな時代だったのでしょう。子どもが産まれたって、大家族や地域のみんなの中で育てられたのでしょう。)

しかし、すべての分野で人々の活動がグローバル化してきて、特に経済分野では大企業を中心となる傾向が加速、それは人口の都市集中を促進し、農村型の大家族による「家」の姿を変えてきました。農村では働き盛りの世代も、その子どもたちも少なくなって老人ばかりが残り、そこでは否応なく地域社会は姿を変え、崩壊への道を進まざるを得ません。一方、大都市では家族の形は核家族が中心とならざるを得ず、しかもすむ場所は生まれ育った町や村とは異なるなじみのない場所であり、そこに「地域」社会を新たに作るうとしても、例えば新しい団地での夏祭りでヒ素入りカレー事件(1998年)が起こったことに象徴されるように、それは非常に困難と言わざるを得ません。

そのような「地域」の崩壊に伴う人々の意識の変化は、私にもきわめて身近に感じられています。1990年代に住んでいた大学の宿舍(12戸からなるアパート)では、最初のころは大家族が出て毎月行われていた清掃がいつの頃からかなくなり(外注されるようになりました)最後のころには、新しく入居する若い人たちが前から住んでいる人の家に挨拶に来なくなって、どんな人が同じアパートに住んでいるのかわからなくなっていました。これでは駐車場の問題なんかが生じたときに困ります。しかし、年齢や立場的にも住んだ年数も一番上になっていた私たちが「ちゃんと挨拶に来い」

なんて言うのもいやで、いずれ定年になったら宿舎を出なければならぬのだし、その宿舎を出ることにしたのです。

現在は市の中心部で最も古くからの町内の、ドーナツ化現象で空いた土地に次々と建てられた新しいマンションの一つに住んでいます（駅や買い物に歩いて行けますし、草むしりや雪かきが必要ないので、年寄りには楽です）その町内会に加わるかどうかは実質的に自由になっているような状態で、月1回の町内会の清掃に出てくるのは新しいマンションの住人のごく一部だけです。

首都圏などの大都市になると、この「地域」社会は崩壊と言うより最初から存在していない場合も多いでしょう。そこに暮らす人々は核家族が単身の人たちであり、地域社会にはついて回る付き合いの煩わしさはないけれども、みんな孤立してしか生きられません。家族の場合、頼れるものは家族しかないという思いが強くなることはやむを得ず、その家族の孤立性とそれがもたらす家族内の密着性から生じてくる問題も大きいと感じます。それが、一方では孤立し援助を得られない家族の中での児童虐待のような問題となり、他方では親の子供の幸せを願う愛情や子供への期待の強さから独立できない子供が引きこもったり拒食・過食などのさまざまな依存に陥ったりするという問題が生じることになっているのではないのでしょうか。

特に日本に特有な家族の姿は母子密着と父親の疎外であると指摘する人がいます。父親が家族から疎外されるのは会社への密着と表裏の関係にあります。母親が夫に期待を持たなくなると、その期待を子供にかけるとこの母子密着が起こります。専業主婦として十分な社会性を持たない母親が、自分の存在を周囲に認めさせる手段として子供をよい学校、よい会社へと駆り立てていくこともあり、それは子供が大人になっても自立できないことにつながりかねません。

家族の崩壊：個人の時代へ

上に述べてきたような「地域」の崩壊の進行とそれに伴う家族の姿の変化はすでに広く認められていることではあるが、現在、そこから状況はさらに進んで、たとえ一緒に住んでいるとしても「家族」の崩壊が始まっていると感じます。

それを促進しているのはインターネットなどのデジタルメディアと、特に携帯電話の普及でしょう。これらのデジタル機器を使いこなせるための知識についていくのは老人にはなかなか困難で、例えば携帯やメールなしにはあり得ない若い世代の人達の間人間関係や行動の姿を祖父母はおろか両親の世代でさえ理解できないという大きな世代ギャップが生じています。しかも、年上の世代が蓄えてきた知識はインターネットで即座に調べて得られることにならず、長く生きてきた中で培われた智恵も世の中の変化のスピードに付いていけなくて、年長者が尊敬の念で受け取られることが少なくなってきました。親としての威厳をもって大きくなった子供を家族にとどめておける余地は小さくなっていると言わざるを得ません。

それよりもさらに大きいのは、それぞれの世代が拠って立つ社会構造の違いの大きさです。すでに老年に達した人達の多くは、前述の伝統的農村文化の色濃い地域社会の中で生きてきたでしょう。それに対し、中高年、すなわち日本の経済発展を支えてきた世代は、家族といえば核家族の、都市型社会の中で生きてきた人が多いと思います。しかし、今、思春期や青年期にかかったくらいの年代以下の若い人たちはというと、一人一人が自分の携帯電話を持って、その番号やメールアドレスの交換が友達関係を示すことに象徴されるように多くの人と希薄につながり、家族関係の方はというと前述のように家族の密着性を強くしようとするゆえに逆にそのつながりの矛盾が露呈してしまうことにもなりがちな、個人の時代の文化の中で生きています。

まとめてみますと、各世代の人達が生きてきた家族像と「家」の姿は次のようになるでしょう。

老年層	-	大家族	-	農村型地域共同体社会の中の家
中高年層	-	核家族	-	都市型産業社会の中で孤立した家
若年層	-	個人化	-	匿名性の情報社会の中で空洞化した家

この個人の時代ということは、単なる晩婚化だけではなく、結婚を意識にいない未婚者や離婚した単身者の増加の背景でもあるでしょう。それに加えて子供を持つ親への支援のための社会システムの整備の遅れ、さらには男性が育児休暇を取ることに對する社会全体の意識が変化しにくいことや、政治・行政や経済の力を握っている男性層の男女共同参画社会に対するヒステリックなまでの揺り戻しの動きなどもあって、少子化に歯止めがかかりません。少子化は社会全体の経済システムとしても大きな問題ですが、一つの家族の中でも少数の子供をめぐる親・子双方に対する大きなプレッシャーとなっています。(ちなみに、韓国では日本を上回る急速な少子化を起こして、この現象が社会の近代化のスピードに関係しているのではないかと感じさせられます。一人の女性が生涯に産む子どもの数の平均を示す合計特殊出生率の最近の値は、日本：1.25、韓国：1.08です。)

一方で、現在、中高年層の人たちにとって、一人暮らしが困難になった親をどうするかは共通の大問題になっています。それをバラバラになった家族では支えきれずに、老人の放置や虐待という問題にもつながってきます。これは日本よりも儒教文化の強い韓国でも問題となっていて、子供の教育に全財産をつぎ込んで何も残っていない親がその子供に捨てられ困り果てるということも起こっているということです。

寿命が長くなって必然的に増えてくる痴呆性老人をどう扱うかは特に大問題で、痴呆を認知症と呼ぶことが定着しつつあるようにこれを病気として医療が担当する(医療保険で見ていく)のか、障害として福祉が担当する(介護保険で見ていく)のかのせめぎ合いがあります。グループホームなどによる後者の方がより低負担でよりよい生活を構築できるのですが、それは地方自治体の負担となってただでさえ破産に近づいている市町村にはまかないきれない状況になっています。

大都市圏とくらべると私たちの住んでいる地方圏、特に少し郊外に出た農村部では三世同居の家族がまだまだ多いですが、そのような場合、それぞれの世代が全く違った文化的背景の中で生きていて、お互いに生き方の違いを理解できないままに、複雑な摩擦を繰り広げている風景をよく見ます。その世代間の衝突が臨界点に達したとき、その矛盾を不安定な思春期の子供たち、特に兄弟姉妹の中で最も感受性の強い子供がある種の病理現象で表すことがよくあり、その代表例が拒食症・過食症だと私は考えています。

このようにお互いに混じり合いにくい文化の中では、家族に心配をかけないことがやさしさであると考えてしまう人も多いようで(それに家族に対しても自分の弱さは見せられないというプライドが複雑に絡み合うのでしょうが)、自分の抱えている問題(例えば負債やリストラやいじめられていること、さらには過食やリストラや援助交際など)を家族の誰にも伝えず一人で抱え込んで、さらに追いこまれていくことになってしまうことも多いという状況です。

家族と食事

さらに家族の形を変えてきたものは、食事の形態の変化でしょう。家族とは単に血縁というだけでなく、「同じ釜の飯を食う」ということが疑似家族として捉えられることを考えても、少なくとも子供たちが大きくなるまでは、みんなが集まって一緒に食

事をし、同じものを分けながら食べることが重要な意味を持っていると考えられます。そこにはそれぞれの家族に特有な食の作法のようなものがあって、その作法という文化は、人間には摂食の本能によるコントロールが壊れてしまっていることを補ってきたという意味合いがあります（大阪大学の学長になられた哲学者・鷲田清一先生の説です）。

食文化にはさらに調理・味付けという大きな側面があり、これもまたそれぞれの家族に特有のものが伝承されてきました。しかし今、作法も含めて、このような文化が破壊されようとしています。その破壊をもたらしてきたものは、一つには、どうしても安易さや簡便さを求めてしまう人間の性質に基づくのかもしれない外食産業の隆盛です。ファーストフードショップやファミリーレストランはさまざまな種類の食事を提供するようになり、最近では家庭料理の惣菜（おかず）を自由に選べる日本食のカフェテリアふうの食堂も増えてきています。それらに家族全員で食べに行くことも多くなり、休日には家族連れで混み合う状況になっています。そこでは家族みんなが自分の好むものを注文して食べることが多いようで、家族みんなで同じものを分けながら食べることはほとんどないように感じます。（ついでに言うと、それらの店では値段の割安感が重要な戦略になりますからどうしても量を多く用意するし、油脂を使う食べ物も多く、外食が生活習慣病の危険を促進する可能性もあります。）

もう一つの大きな要因は、生活時間帯がバラバラになって家族全員がそろっての食事が難しくなってきたこと、さらにはそれが進んで家族の中にあっても個食化といった状況が生じてきていることです。個食という言葉が作られたのは1983年ころと言われているといふん昔のことですが、仕事から夜遅く帰ってきてても冷蔵庫の大型化と電子レンジの発達で自由に暖かいものが食べられるようになり、ラップという包装材料の発達も含めて、そのような技術の発達も個食化を促進したのかもしれない。

その頃からしだいに小学生・中学生の中に朝ご飯を親に用意してもらえなくて一人で食べたり、あるいは食べずに来る児童・生徒が増えていることが報告されるようになり、弁当もまたコンビニ（コンビニエンスストア）などで調達することが増えているし、家で食べたり弁当を用意したりするとしても、その食材はスーパーマーケットの総菜売り場で出来合のものを買ってくることも増えていて、家庭の味という文化は消滅寸前の感があります。その子供たちが間もなく親になるとすると、もはや家族そろって食事するということが自体が消えてしまう時代となるのかもしれない、家族の意味合いはさらに大きく変化するでしょう。コンビニや外食が発達し、それが夜遅くまでや24時間のサービスを競うようになっているなど、独身で暮らすことが便利になって、家族を作ろうとすること自体が少なくなってしまう、その傾向に拍車をかけているのではないのでしょうか。

家族の再生に向けて

このように述べてきましたが、私はそのような伝統的文化の破壊はよくないから昔に戻るべきだと言っているのでは決してありません。そのような社会や文化の動きは人為的に簡単に操作できるものではないでしょう。例えば父権の復活を叫ぶ人がいますが、それが可能とは思えませんし、たとえそれができても、それで家族のみんなが幸せに、心豊かに暮らせるようになるとは決して思えません。私たちはその破壊されてきているものに変わる新しい何かを作っていかなければならないのでしょうか、それがどのようなものか見えてこないのがつらいところです。

しかし家族は心の最後の拠り所かもしれない、それを何とか機能するものにさせたい。それにはどうしたらいいのでしょうか。私が頭を絞って何とかたどり着いたのは、親も

子も、自分のかかえている物語をきちんと言葉にして伝えよう、ということです。親子なら（あるいは夫婦なら、彼氏・彼女なら）言わなくてもわかってよ、というのは単なる甘えで、例えば不安を抱えていることは伝わっても、その不安の内容は言葉にして伝えないと絶対に伝わらないのです。その言葉は、例えば「うざい」とか「きもい」とかいった、ただ気分を吐き出すような言葉ではなく、生きてきた人生の中の物語であってほしい。その物語を家族で共有したい。

物語の共有とはどういうことでしょうか。例えば、「Always 三丁目の夕日」という映画にあった場面ですが、売れない小説家が飲み屋の女の人に惚れて、想いを伝えるのに指輪を贈ろうとします。しかしお金がないから、指輪の箱だけを送ります。小説が売れたら中身を贈るという意味です。その女の方は箱を開けて中身がないのを見て、男に手を差し出し、「その指輪をはめてよ」と言います。そうするとその男は、本当はない指輪をつまみ上げて初めて女の方の手に触れてその指に指輪をはめてやる（ふりをする）、そうすると女の方が（本当はない）指輪を電気にかざして「まあ、きれい」と言うのです。その二人にはまちがいなく一つの物語が共有されました。

そのように、それぞれ自分の物語を言葉にして話し、相手の物語を心に受け止めていく、そうやって家族のみんなが物語を共有するようになっていく、それが新しい家族を作っていくために最も重要なのではないかと私は考えています。特に親の方からは、子どもを指導し、コントロールする立場としてではなく、たまたま縁あってこの世と一緒に生きていくことになった一人の人間として、同じ高さの目線からの言葉がほしい。「言葉を！」、「物語を！」と家族の再生のために強調したいと思います。

福島お達者くらぶ連絡先

960-1295 福島市光が丘1番地 福島県立医科大学医学部 神経生理学講座 香山雪彦
電話（お達者くらぶ専用）：070-6622-8026 メール：y-kayama@fmu.ac.jp

電話は呼び出し音が20秒鳴っても出ないときには留守電（伝言メモ）につながり、「はい、福島お達者くらぶです。今、出られませんので、メッセージをどうぞ。」との音声流れます。録音可能なメッセージは約15秒以内です。それも、4件までしか録音できません。留守電を聞いて、必要な場合にはこちらから電話しますが、この専用電話はほぼ着信専用なので（この電話からかけられるのはあらかじめ指定した3つの電話番号だけという契約になっています）、別の番号の電話からになります。（その場合、024-548-2571からの電話になることが多いと思います。この電話は着信はFAX専用なので、この番号にかけてもつながりません。）

連絡はなるべく手紙かメールでいただけたらと思いますが、お達者くらぶやミーティングについての問い合わせなどは遠慮なく電話していただけてください。初めてで様子がわからない方もどうぞ電話してください。香山は会議や講義で不在になっていることもあるので、一回でつながらなくてもめげずに何度もかけてください。夕方5時以後も、9時くらいまでいることも多いと思います。

ただし、個々の問題についての相談には応じられません。それは、全く同じように見える人でも、例えば抱き留めてあげるのか、逆に突き放してあげる方がよいのかなど、人によっても、その人の時期によっても、全く違った対応が必要になることが多く、それは長い時間をかけて何度も何度もお話を聞かないと判断できないことで、電話では責任ある対応ができないからです。ご理解下さい。

お達者くらぶやミーティングについての案内はホームページに出ています。アドレスは <http://www.ipc.fukushima-u.ac.jp/~e100/index.htm> です。メッセージや寄せ書きなども出していますので、ぜひ見てみてください。